

## 令和3年度第2回熊野市総合教育会議会議録

1. 日 時 令和4年2月9日(水) 午後1時30分から

2. 場 所 文化交流センター 交流ホール

3. 出席者 熊野市長 河上敢二  
熊野市教育委員会  
倉本教育長 根引委員、高見委員、北野委員

4. 事務局関係

教育委員会事務局

雑賀総務課長、伴学校教育課長、弓場社会教育課長

森倉学校教育課長補佐、浦坪学校教育課指導主事

泉総務課庶務係長

市長公室

濱中市長公室長

総務課

吉井総務課長

5. 事 項

- (1) 熊野市の子ども達に今育むべき力をどうつけていくか
- (2) 今後の生涯学習事業について
- (3) その他

雑賀総務課長 定刻になりましたので、ただいまから令和3年度第1回熊野市総合教育会議を開催いたします。

本日の司会進行を務めさせていただきます教育委員会総務課長の雑賀でございます。よろしく願いいたします。

開会前に出席の皆様のご自己紹介をお願いしたいと思います。根引委員からお願いいたします。

出席者 (自己紹介)

雑賀総務課長 開会にあたりまして、河上市長からご挨拶をお願いします。

河上市長 こんにちは。まずは、皆様におかれましてはお忙しいなか令和3年度第2回目の総合教育会議にご出席をいただきましてありがとうございます。

また、日頃、当市の教育行政の推進にご尽力をいただいておりますことに、この場をお借りして心から感謝を申し上げます。

全国的に新型コロナウイルスの感染症、オミクロン株による感染が急速に拡大しております。三重県におきましても、全域でまん延防止等重点措置の適用がなされているところでございます。おそらくその延長も早急に決まるのではないかと考えておるところでございます。残念ながら熊野市におきましても、毎日のように感染者が出ておまして、換気の徹底でありますとか、不織布マスクの適正な着用など、感染防止対策の更なる徹底が必要と考えております。

本日ここにお見えになっている皆様にも引き続きご協力をおねがいたします。

今年度2回目の教育会議でございますが、11月の第1回目の会議におきましては、熊野市の子ども達に今育むべき力をどうつけていくか、これからの生涯学習をどう進めていくかを議題にご意見を伺ったところでございます。

本日は、1回目に引き続きまして1つ目でございますが、熊野市の子ども達に今育むべき力をどうつけていくかを議題にその解決のための取り組みについて、そしてまた学校におけるICT機器による授業等での活用状況について授業の動画等も交えながら報告をさせていただきます。

2つ目は、今後の生涯学習事業につきまして、第1回目以降の状況や次年度以降の生涯学習事業の進め方について説明をさせていただきます。

委員の皆様には忌憚りの無いご意見をいただければ幸いです。今後も学校教育分野及び社会教育、社会体育の分野の振興と充実のために幅広い取り組みを行ってまいりたいと考えておりますので、皆様には、なお一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本日はどうもありがとうございます。

雑賀総務課長

ありがとうございました。

会議を進めていく前にお手元に配布の資料の確認をさせていただきます。3種類でございます。

1枚目が本日の事項書、2つ目が横長の「令和3年度 第2回熊野市総合教育会議」と記載されたものそして3つ目が「資料」と記載されたものでございます。以上ですが、よろしいでしょうか。

それでは、2番の事項に入らせていただきます。本日は、先程の市長のお話にもありましたとおり前回に引き続きまして、2つの事項を予定しております。

それでは、1つ目の熊野市の子ども達に今育むべき力をどうつけていくかでございます。事務局の説明をお願いします。

伴学校教育課長

学校教育課の伴でございます。よろしく申し上げます。議題の1つ目について提案させていただきます。

お手元の資料1ページをご覧ください。なお、お手元の資料に無い映像も、委員の皆様の前スクリーンに大きく映し出しております。それから、後ろにはモニターの方にも映しておりますので、こちらを中心に見ていただければと考えます。

令和3年11月8日に実施いたしました総合教育会議において、学校教育課として、今後の取り組みの方向を、子ども達の明るい未来を拓く学校教育の推進と銘打ち、4点を目標として進めていくことで整理していきたいと提案させていただきました。

今回は、これらを踏まえた今年度の取り組みについて、具体例を交えながら報告し、今後の取り組みに活かすべく、ご意見をいただければと考えております。よろしくお願いたします。

まず、前回の報告させていただいた本市の子ども達の経年的な課題でもあります、国語の書くこと、読むことの課題に対しての分析として、学習指導要領に求められている力を着実につけていく、更に目的や意図を明確にしたアウトプットの機会を意図的に作っていく、そういったことを整理いたしまして、具体的な取り組みとして、①②③を提案させていただきました。

その中の①です。児童生徒の学力向上を目指し、教員の指導力向上を図る研修会の実施についてです。

これについては、第3回の熊野市学力向上推進研修会におきまして、オンラインで開催したのですが、その中身として主体的対話的で深い学びに繋がる授業づくりに向けて、国語を軸に提案をいたしました。特に中身としては、先程言わせていただいております課題、あるいはその課題を解決するための様々な取り組みについて提案をさせていただきました。

次は、お手元の資料には無いので、画面の方を見ていただきたいと思います。更にその4点を具体的に実現するための資料として、ワークシートの活用を提起しました。

このワークシートは、文部科学省から授業改善の資料として示されているものです。

このようなワークシートを授業の中で具体的に活用いただき、確実に力をつけていくことが大切であると提起しました。

また、研修会の中では、各学校の状況により課題も様々であることから、全国学力学習状況調査結果をあらためて分析・活用いただくことも提起しました。

次に、②研究指定校を指定し授業方法の工夫改善を推進く公開授

業研究発表会>については、今年度、市の研究指定校の新鹿小・中学校が、令和4年1月19日（水）に研究発表会を実施しました。

新鹿小中では、研究主題を「自分の考えを論理的（筋道を立てて）に表現できる児童・生徒の育成」とし、具体的研究内容については、小学校が2点、中学校が3点到整理し、取り組んでいただきました。これらは、見ていただくとわかるように、先ほど提起した熊野市の課題を改善するための取り組みとも合致したものでした。

研究授業の様子の写真をご覧ください。

小学校1年生の国語で説明文を扱った授業です。子どもたちが書くことに抵抗なく取り組みやすいよう、黒板で示しているのがわかるかと思います。また、担任が子どもたちにしっかり寄り添うなど、少人数であることを生かした授業が展開されておりました。

小学校5・6年の国語は、複式学級で1時間の間に違う授業を同時に行う、いわゆる「わたり」の授業で行われました。この形式は、市内のすべての複式学級で行われている形態です。

ここでも、黒板やホワイトボードに書くことに抵抗なく取り組みやすいよう示されていました。

また、ここでも担任が子どもたちにしっかり寄り添うなど、少人数であることを生かした授業が展開されていました。

特にこの地域においては、このような複式のわたりの授業の中で、確実に力をつけていくことが大切であることを皆で確認したところでもあります。

一方、中学校では、3年生の数学で実際の場面で数学の定理が活用できる内容を、子どもたち自身で作業等を通して身に付けていく授業が展開されました。

子ども達にとって、テニスコートを書くということは、三平方の定理を使ってできるということを自分達で発見していくような授業です。

次に、③ICT教育の一層の推進「ロイロノート」の活用についてです。

「ロイロノート」の活用については、情報担当者研修会において、各学校の担当教員が研修を深めてきました。

その研修をもとに、市内小中学校における授業での活用事例を授業の様子動画で紹介したいと思います。2つの授業を紹介したいと思います。

1つ目が金山小学校4年生の国語です。2つ目は入鹿中学校3年生の英語です。動画をご覧ください。

この動画は、情報担当者研修会の中で、市内の学校の先生方に参考

として見ていただいております。

(動画にてロイロノートを活用した授業の説明)

2つ授業を見ていただきました。今度は、授業以外での活用です。学校と家庭などとを繋いだ活用として紹介させていただきます。

まず1つ目に不登校児童・生徒への支援があります。

市内のある小学校では、家庭の端末を使い、定期的にオンライン授業を実施したり、あるいは、市内のある中学校では、貸出端末や不登校の児童生徒が通っている教育支援センター「きのくに」において、その端末を使いオンライン授業を実施したりもしています。

また、その他の様々な理由で欠席した児童・生徒への支援も、市内小中学校では、貸出端末や家庭の端末を使って、オンデマンド授業の配信をしたりすることもありました。

市内の中学校の事例として、ネット環境のない所に、学校から端末を貸し出し、市教委からはモバイルルーターを貸し出し、オンライン授業やオンライン教材等での学習を実施したりしました。

(画像を映して説明) これは、教育支援センター「きのくに」でのロイロノートを使った学校との双方向学習を行っている様子です。

ロイロノートを使って、クラウド上で学習することができますので、こういったオンライン活動が進んでおります。

さらに、市事業「地域未来塾」も、今年度は、冬季休業中にオンラインで開催しました。(画像を映して説明) 今回の「地域未来塾」は、市教委事務局内に仮設のスタジオをつくり、カメラの設定や調整、スイッチングなどもすべて大学生講師が行いました。

この画像は、手元を映すことができるカメラを使い、分度器の使い方を説明している場面です。

このような作業については、実際に使っているものと同じように作業している手元がうつっているため、子どもたちにとってもとてもわかりやすい映像になったようです。

こういったことは、今後の学校でのオンライン授業の効果的な活用にもつながると感じました。

今後に向けても、この3点を中心に、より一層目的を明確にしながら整理し、具体的に進めていきたいと考えています。

学校教育課からは以上です。

雑賀総務課長

それでは、ただいまご説明させていただきました事項につきまして、皆さんからご意見、ご質問等を頂戴したいと思います。どうぞよろしく申し上げます。いかがでしょうか。

北野委員

今、非常に素晴らしい授業風景を見させていただきましたけども、実際授業を受けている児童生徒さん方の評価というか満足度と、ロ

イロノートを使ったことによりどれくらい成果が出たか、またわかればでいいんですが、他地域でロイロノートが使われているところがあれば、学習効果として成果が出ているのかどうか2点お伺いしたいと思います。

伴学校教育課長

児童生徒の満足度なんですが、このことに特化して調査はしておりませんので、はっきりしたことは言えないんですけど、子ども達はこういったICT機器を使うことに抵抗が無いこと、普段は中々授業に参加できない子もこれで参加できるというようなことも報告として上がってきていますが、数字としては掴んでおりませんので、今後掴んでいきたいと思えます。

ロイロノートにつきましては、本格的に活用しだしたのは今年度からであります。4月以降での状況ですので、昨年度まではこういったことはやっていなかったということでもありますので、今後検証を行ってまいりたいと考えております。

他地域の状況なんですが、県内では、このロイロノートは29市町中17市町で導入されています。市だけでいきますと、14市うち9市で導入されています。私個人的に、昨年度まで県の教育支援事務所にありましたので、県内の状況を色々と見ておりますと、昨年度は四日市あたりで、先程も申し上げましたヒントを与えるような授業を算数でやっておりまして、一人一人違ったヒントを先生が投げられますので、その子に適したヒントをあげることができる、そういった授業を見せていただいたこともあります。

以上です。

教育長

ロイロノートについては、県内の情報を取ったり尋ねたりしているんですが、活用については、熊野市は進んでいる方です。まだ、すべての教員が使いこなせているかということ、そうではありませんし、すべての学校で活用されているかという部分についても、まちまちであります。このロイロノートの活用ですとか、ICT機器の活用が進んだのは、今年度、情報担当者研修会8回実施した成果であります。この8回の中で、熊野市教委は、ICT支援員を配置してもらっているんで、その支援員が中心となって各支援、指導を行っております。各校を回っております。そのことが非常に大きい。ロイロノートが普及、定着しつつあるのは、このICT支援員の存在が非常に大きいものがあります。ですから、次年度も引き続き学校の支援については、ICT支援員、学校教育課指導主事を中心に進めていくということでございます。

北野委員

どうもありがとうございます。こういったことについては、どうしてもついてこれないお子さんもいらっしゃると思えますので、そう

いったお子さんへのフォローもお願いいたします。

根引委員 お話を聞かせていただいて、ハードがここまで充実していることに非常に驚きました。今後は、ソフトの充実も行っていただきたいと思います。学校での授業改善としては、学びあいということ面で重要だと思いますが、ロイロノートなどICT機器の活用で学力の向上まで成すことができるのでしょうか。

伴学校教育課長 授業の目的がなんなのかということを確認にすることが大事なことだと考えております。そういった中で、ロイロノートやICT機器については、使うことが目的ではなく、あくまでツールとして効果的に使える場面で活用していければと考えておりますので、すべての場面で効果的に活用できるというものではございません。ただ、先程見ていただいた映像にもありましたが、分度器を使う授業にあったように、ああいったものについては効果的であります。

また、対話といったアナログ的なものも大事なものがあります。コロナ禍でそういったことが出来ない場合もありますので、ICT機器を使って意見を交換し合うことができるといったことも、活用できる部分であると考えております。

根引委員 こういったICTの導入については、個々の先生方には負担になる方もいらっしゃると思います。そういった場合には、教材の提供やICT支援員を有効に活用して、負担をかけないような進め方もしてあげていただきたい。

伴学校教育課長 ICTアドバイザーには、教材を持参して支援に行ってもらっているのですが、そういったところでは、教員の負担軽減を図っております。

高見委員 先ほど映像を見させていただいて、発言する機会が増えていいことだなと思いました。4年生が2年生を指導するというのは、教える方も身につくことがあると思うので、大変いいことだなと思いました。1点質問させていただきたいんですが、中学校では、タブレットに発音を録音してましたが、それが合っているかどうかは、先生が確認されているのでしょうか。

伴学校教育課長 これまでは、相対して発音を聞いておりましたが、録音したデータを担任が聞いて確認しております。何度も聞き返せるので、正確に聞き取れるほか、より適正な指導に繋げることが出来ます。

高見委員 今後、その成果が出てくるのを期待しています。

河上市長 ICTの話は、たしかに手段ではあるんですけど、これからの時代はICT使えるのが前提になるんで、これに慣れることが1つの目標になってもいいと思ってますから、どんどん活用していただきたい。

ただ、今回は、大きな目的は、育むべき力をどうつけていくかという、相変わらずアナログ的な勉強の仕方っていうのは必要になってくると思うんですよね。それはICTで一括して教えることはできなくて、今までのような授業のやり方が大切で、そのことでいえば、2ページの①にあるように、教員の指導力向上を図る研修会、こういうものは非常に大切だと思うんです。具体的にどういう研修をされてるのか、これによって先生方は研修を受けて、教える能力がアップすれば、子どもたちの学力がアップするというのがあると思うんですが、具体的にそういう関係性は出てるんでしょうか。

伴学校教育課長

この研修会で活用させてもらっているのが、全国学力学習調査の状況調査でして、先程の研修会で示しておりましたSP表というものなんですが、生徒と問題の関係を表したものなんですが、色分けされてるんですけど、たとえば国語の問題でいうと、この学校ではどの問題が弱いのか、表でいうとオレンジの部分が間違っているところなんですけど、この問題が多いクラスについては、今一度学校全体としてきちんと教えなおす。特に学習指導要領で求められている目標をきちんと押さえているかということを確認していただく作業を研修会の時に具体的にやらせていただいております。それぞれの学校はそれぞれの課題を抱えておりますので、それを授業に反映するというところを行っております。これまでの全国学力学習調査は、6年生だけで実施しておりましたので、他の学年の先生方、あるいは中学校は中3の子が実施しておりましたので、他の学年の先生方は中々、自分の授業のところに持っていきことができなかつたんですが、こういう資料ができるようになってきましたので、そういうところまで落とし込むような形をとって、取り組んでやっています。

これについても、成果がどこまで上がってくるのかというのは今後の部分でありまして、上がってくるのを期待しながらやらせてもらっています。

河上市長

個人的なことを言うと、先生の教え方、本当に細かいところまでの教え方によって子どもたちの気づきが全然違うと思うんですよ。資料には出ていなかったんですけど、画面で出てたなかで、読む力の説明の中で、感想と意見を区別するっていうのがあって、感想と意見をどう区別するのかという時に、若干テクニックを教えればすぐ違いがわかるわけですね。感想だったら思うままでいいけど、意見だったら思うままでは意見にはならないから、こうしなければいけないとか、人にやってもらわなければいけないこととか、という一言を加えるだけで全然違ってくる。先生方の評価に繋がることなんで非常に言い辛いんですけど、教え方の上手くて成績を伸ばせられる先生と、

そうでない先生とは、そういう細かいところに差が出てくることがあるんで、ただ研修会をやればよいということではなく、今の学校教育課長の話は、弱い所をもう1回やるということなんで、教え方が悪ければ弱い所を何回やっても急激に伸びることは無いと思うんですよ。だから、先生方の学び自体もものすごい細かいレベルまでやってもらわないと、子ども達には伝わらないだろうと、というのが私の感想です。感想なんで正しいかどうかはわかりませんが。

それともう1つ、熊野市は残念ながら全国平均のものもあるが、そうでないものも分野によってはあります。願いとしては、全ての子どもが平均以上をいっていただきたいというのが願いなんですけど、そのために色んなICTとか、使っていただくのは、どんどんやっていただきたいんですけど、どうもまだ平均で見ている部分があって、ICTを使うもう1つのメリットというのは、1人1人の弱い点を集中的に学習させられるプログラムというかアプリもあると思うんで、そういうものも活用していただきたい。私が小さい時の経験で言うと、平均的なことを教えて、少しできない、少し理解の遅い子は、これぐらい、だけど、理解が進んでいる子からすると、それ以上前に進めないということがあるんで、そこは平均的なところをやりながら、早く進む子はICTを使って自分でどんどんやる。遅れてる子も逆にICTを使ってどんどん追いつかせるといような、そういう1人1人にきめ細かなやり方というのも今後は是非検討していただきたいなと思います。

伴学校教育課長

今、市長がおっしゃっていただいたのは、まさにそのとおりだと思っております、やっているところまでは言えないんですけど、テクニク的な部分が、最初に申しあげましたワークシートの中に入っております。きちっと整理して書くべきことなども、ワークシートの中に書いておましてそれを先生方に伝えて、それを他の授業にも汎用していただくような形をお願いしているところでもあります。それから、先程からおっしゃっていただいております、1人1人に対応していくやり方につきましても、我々の中では個別最適化ということで文科省からいわれておまして、具体的な例では、県が今現在やっているんですけど、みえスタディチェックというのがあります。小学校5年生と中学校2年生がやってるんですけど、これがCBT(コンピュータベースドテスト)ということで、パソコンに直接入力する方法で、その結果が瞬時に出来ます。そこに紐づけされたワークシートも提供される形をとってくれています。弱い部分をそういう形で補っていくということも県もやり始めておりますので、市長が言っていただいたように色々なアプリですとか、大手の民間事業者もそう

いうやり方をとっていると聞いておりますので、上手く活用できないかなと検討しているところであります。

根引委員

ロイロノートを見ると、以前は授業の時に机間巡視をしながら、子どもの様子をみていたとあるんですが、ロイロノートの中で、個人のそれぞれの状況が把握できるという利点がすごく見えた気がしました。それによって、この子はここがわからないというのが、教員側が把握しやすい。市長がおっしゃるようにそういった中で、個別の指導計画というのは、少しずつ立てられると思います。そういう感想を持ちました。

話は変わるんですが、今、不登校の子どもたちのサポートをしていれないといけないと思っています。それは保護者からの願いでもあります。最近少し増えてきたという話も聞きました。そういった子ども達へのサポート状況をお伺いしたい。

伴学校教育課長

不登校につきましては、全国的にも増えてきている傾向にあります。市内においても、数は、急激にはありませんが、徐々に増えてきている状況にあります。特に「きのくに教室」と呼んでいる熊野教育支援センターへ通室する生徒は非常に増えております。根引委員が校長でいらっしゃった時は1桁程度だったと思いますが、今は、20人を超えて通室している状況であります。全員が熊野市の子どもだけではないんですけど。熊野市と御浜町、紀宝町を合わせた数字なんですけど、それでも半数以上は熊野市という状況になっています。

我々も、不登校については、学校に戻ることも目的の1つではありますが、一番の目的は、社会的自立を図っていくこと。どうしても不登校の子が何も手を差しのべられず、そのまま引きこもってしまうという形で、社会的自立が果たせないという状況だけは、絶対に避けていきたいというふうに思っております。このICTを活用したり、様々な形でアプローチしているところであります。

高見委員

定期的にオンラインによるサポートを行っているとのことですが、この定期的なという周期はどのような程度なんでしょうか。

伴学校教育課長

今回ご紹介したお子さんは、オンラインによるサポートを毎日行っております。お子さんによって様々な状況がありまして、先程申し上げましたオンデマンドで授業の様子をそのまま、教室にカメラを置いたままで映して流しているというような実践もあります。色々なやり方がありまして、定期的なものも不定期的なものもございます。

高見委員

定期であったり不定期であったり、お子さんに合った形でやっていただいているということですね。わかりました。

根引委員

大学生も講師として手伝ってくれている地域未来塾というのが最後にあったんですけど、大学生の反応と子どもの反応を教えていた

だけですか。

伴学校教育課長

この地域未来塾なんですけど、7年ほど前からはじめたんですけど、その時に大学生だった方が、今、教職に就いてこの地域で学校の教員になられている方もおります。その方々に話を聞くと、あの時の経験が採用試験や教育実習に非常に役に立ったということで、すごく喜んでいただいております。

今回初めてオンラインでやったんですけど、大学生の反応としても、初めての試みで楽しい反面、子どもたちが本当に理解しているのか非常に不安でもあったという声もいただきました。

一方で対面の未来塾を実施する時にも、是非来たいという声もありました。

今講師として大学生が帰省した時にやってもらっているんですけど、ほとんどの学生が来年もやりたいというふうに言っているところなんです。

参加者については、今回非常に少なかったんですけど、オンラインでやって感じたのは、今回の参加者が市内の山間部の子どもが多くさんかしてくれました。今までは、集合で市民会館でやっておりましたので、木本中学校校区、有馬中学校校区の子どもたちが多かったんですけども、今回そういう傾向がありませんでした。

逆に言うと、そういった山間部の子どもたちにとっては、オンラインの形の方が参加しやすいのかなという感じがしましたので、来年度以降は対面と、オンラインをハイブリッドな形でやれないかなと考えております。

参加している子どもたちは非常に満足度が高く、何年も続けて参加しているお子さんもいます。

教育長

地域未来塾につきましては、継続してやっておるんですけど、今年度は先ほど言いましたように、Web上でZoomを使って実施したということです。

これはこれで大きな効果を発揮していると思います。子どもたちにニーズに応じた多様な学びの場、多様な指導者に学ぶという機会是非常に効果があると思います。ましてや大学生は子どもたちと近い年齢にあります。非常に親近感が湧いて一生懸命取り組んでいたように感じます。

もう一点PRさせていただきたいのは、退職した教職員がボランティアで毎週土曜日、土曜塾「熊野学び舎」というのをやっております。

今、コロナ禍ですので、小学生の参加については控えてもらっていただいて、受験を迎える中学校3年生を中心にやっております。

今後子どもたちや保護者のニーズに応じた、多様な学びの場を提供していけたらいいなと思っております。

河上市長

地域未来塾というのも更に拡大をして、大学に通っている学生さんが住んでいる所から継続してやっていただくという形なども発展させていってはどうでしょうか。

こういう場所でやると、市街地周辺の子どもさんしか来られない。市の方でも大学生も含めて教員のOBの方に、特に学習塾の無い場所で、まさにICTを使えば場所は問わないわけですから、場所を選ばずに誰でもできるので、やり方を工夫すれば常に継続してできるということもありますから、是非一考をお願いしたいと思います。

雑賀総務課長

よろしいでしょうか。

それでは、次の項に移りますが学校教育課長はどうしても離せない用務がございまして、退席をさせていただきます。お許してください。

それでは2項目目の今後の生涯学習について、事務局の説明をお願いします。

弓場社会教育課長

社会教育課の弓場です。続きまして2項目目の今後の生涯学習事業についてご説明いたします。資料の9ページをご覧ください。

前回の総合教育会議から経過が2か月ほどでございますが、現在まで市民の皆さんに可能な限り学習機会の場を提供できるよう、各種講座を行っております。

そういった中で、前回の会議と比較して、各講座の実施回数や延べ人数は増加しているところではございます。課題や今後の取組みの方向性については、大きく修正するものではなく、再確認という形になるかと思っております。

しかしながら、前回の総合教育会議でご指摘いただいたように、市内で生涯学習講座に関するアンケートを実施したところ、おおまかではございますが、生涯学習講座の参加経験のない方の考えなど、ある程度つかめた部分もございます。アンケートの結果につきましては、後程、触れさせていただきます。

今回は、各講座の総括、そして長いスパンでみえてきた課題を考察し、アンケート結果もふまえつつ、これからの生涯学習講座についてご説明させていただきたいと思っております。

まず、9ページで子ども、一般、高齢者と、対象ごとに整理して考えさせていただきました。

子ども対象の講座につきましては、より多くの学習機会と学習分野を創出し、満足度の高い講座を今後も開催していきたいと考えております。

次に、一般向けの講座につきましては、文化交流センター以外の場所でも開催可能な講座、或いは、場所を限定しない講座を創出するなどして、より多くの方々に潤いと生きがいを感じてもらえる講座の開催をしていきたいと考えております。

そして、高齢者の方々に参加してもらおう講座につきましては、主に、紀和寿学園になってまいりますが、当該講座に限らず、出来るかぎり、多くの方に参加してもらえよう、山間部や海岸部などでの講座開催や、みんなで集まることで楽しみ、賑わいによる生きがい創出をこころがけた講座開催をしていきたいと考えております。

それでは、個別の説明に移らせていただきたいと思います。

10 ページ及び資料の1 ページ「生涯学習講座実施状況」をご覧ください。なお、実績として記載させていただいている各講座の実施回数や延べ人数は令和3年12月末現在のものがございます。

まず、子どもを対象とした講座でございます。いっしょに花づくり、チャレンジ科学、囲碁の3つの教室につきましては、全て実践型であり、普遍的に人気のある講座でございます。

来年度以降の取組といたしまして、チャレンジ科学につきましては、広い場所が必要なことから、交流センターの交流ホールをメイン会場としておりましたが、紀和B&G海洋センターや学校を会場として使ってみるなど学習機会をできる限り多くの子どもたちに提供していきたいと考えております。

また、新たに、「巡ろう熊野市の文化財」と銘打ちまして、小学5、6年生を対象とした文化財ツアーの実施を計画しているところがございます。今年度、改訂されます子ども文化財読本に掲載されている文化財をとりあげ、知ってもらいたい、興味をもってもらいたい郷土の歴史について、学校教育課とも話し合いをし、定員10名ずつで2回、実施したいと考えております。

次に、図書館事業といたしまして、小学生対象のキッズ司書育成事業、幼児など小さなお子さんを対象とした読み聞かせ等の3事業がございます。

キッズ司書につきましては、令和2年度から開始いたしまして、年間カリキュラムを通し、司書の細やかな指導もあって昨年度は5名の小学生がカリキュラムを修了し、今年度も10名の児童が現在まで受講しているところがございます。特に年末年始の図書館恒例企画となっている福袋の作成においては、こども向けのものは、ほとんどキッズ司書の児童らが作成してくれ、利用者の方には好評をいただいております。昨年度のOBの児童も、お手伝いとして参加してくれており、事業そのものの滑り出しとしては、現在のところ、良好なも

のと言えるのではないかと考えております。

後も継続していくためには、コロナ禍においても自宅でできる選書リストやポップの作成など代替え可能なカリキュラムも講座の中に取り入れたり、また、終了後、アウトプットできる場を整えていく必要があります、そのためには学校現場との連携や既存の図書館事業との横断的な連携を考えなければいけないと思っております。

このことについては、例えば図書館の夏の企画展示である夏休みの宿題おたすけ特集などの選書などについて、複数のキッズ司書が所属する学校を一つのモデル校とし、図書館と学校図書室が協働して試験的にではありますが展示のコラボ運営を考えてまいりたいと思います。

そして、3つの読み聞かせ事業につきましては、参加人数の減少傾向がみられております。先日、図書館でアンケートをとったところ、利用者の参加可能な時間帯で一番多かった意見が土曜日の午前でした。現在、3つの読み聞かせ事業で、その時間帯に開催しているものはないため、ボランティアさんとも相談して、その時間帯で開催できるよう、調整してまいりたいと思います。

そして、これら読み聞かせ事業につきましては、年間を通してのものでございますので、いつでも気軽に参加ができるよう、参加風景の画像による周知などで多くの親子に参加してもらおうよう取り組んでまいりたいと考えております。

続いては、一般対象のものでございます。11 ページをご覧ください。

まず、囲碁教室、書道、スマホよろず相談室について総括及び今後の取組みを説明させていただきます。

これらは、コロナ禍における影響により、教室そのものの延期や中止、定数減となっております。

囲碁や書道につきましては、今後も継続していくべき生涯学習講座の一つであることから、講師の後継について、囲碁では、現在、子ども囲碁教室で講師を務めている元受講者の方には引き続き、時間の許す限りご協力いただき、また、数年先を見据え、地道に他の方への呼びかけも行っていきたいと考えております。

書道につきましては、まちの人材活用事業に登録していただいている方への講師依頼を念頭におき、開催が絶えることのないよう、注力していききたいと考えております。

そして、今年度から開始しましたスマホよろず相談室でございますが、当初SNS利用促進教室として、LINEやフェイスブックの入門講座として始めてみましたが、実際にはじめてみると、スマホそ

のものの初歩的な使い方を教えてほしい方が多いというのがわかった次第です。12月からはスマホよろず相談室へとシフトチェンジいたしまして、今年度中、出来る限り、開催数を重ねていく予定としております。参加者も徐々に増えてきており、1月20日に開催したときは8名の方に受講してもらいました。

来年度は回数を24回に増やし、もっと多くの人に知ってもらい、参加してもらえるよう、募集チラシなど周知媒体にナッジ理論を活用したり、また、文化交流センター以外の場所でも開催するなどしてまいりたいと考えております。時期をみて、スマホよろずからステップアップし、本来のSNS利用促進教室へのシフトチェンジも図ることといたしたいと思っております。

続きまして、12ページをご覧ください。家庭菜園教室とフラワーデザイン教室でございますが、特にフラワーデザインのメンバー固定化の傾向があることから、次年度は、新たな参加者が受講できるよう、入門編と中級編に分けて、見直しを図ることといたします。

そして、市民大学でございます。1回目に予定していた戦国武将の末裔・長宗我部氏の講演が中止となり、また、先日は三重県との共同開催の特別講座も中止となるなど、コロナ禍の影響を受けてしまいました。

ウェブ配信によるサテライト化を試みておりますが、機器の音声トラブルにうまく対応できず、また、サテライト会場での受講者もございませんでした。もっと導入試験の回数が必要と考えております。今年度最後の市民大学は2月20日に予定しており、サテライト会場は紀和B&G海洋センターを予定しております。現在、ネット環境を確認し、配信テストを行っているところでございます。

こで、冒頭で申し上げました生涯学習講座に関するアンケートについて、簡単に説明させていただきます。資料の2ページのアンケート集計結果をご覧ください。

紀和総合支所と8つの出張所に協力を得て、支所・出張所に来ていただいた住民の方111名のアンケート調査を実施いたしました。

受講経験者の割合は、回答者110名中16名、受講経験者による今後の参加意欲のある方の割合は、回答者17名中14名、受講経験のない方の参加ができない大きな理由は交通手段、その他は講座内容となっております。

講座への参加条件としましては、地元開催という方が回答者84名中45名という結果となっております。このように、十分な調査方法ではないかもしれませんが、一定の現況については、把握できたのではないかと考えております。

特にこのアンケート回答者の年代をみると、60代以上が7割を占めており、後述する高齢者対象の生涯学習事業との繋がりも考える必要があると考えております。

それでは、本冊12ページをご覧ください。そこで、アンケート結果を踏まえまして、次年度から山間部や海岸部での出前講座を実施したいと考えております。

4回の実施を考えておりまして、例えばではございますが、アンケートにおいて地元開催の回答数が多かった育生、五郷、荒坂、上川を次年度の候補としております。まだまだ青写真の段階ではございますが、地元区長さんに協力を仰ぎ、育生町であれば育生小学校を会場とし、尾川文書（オガワモンジョ）などについて、文化財専門委員に講演をしていただくなど、内容を考えております。当該出前講座の趣といたしましてはミニ市民大学をイメージしておりまして、この出前講座をきっかけとして熊野市民大学の新規の受講者となっただけのように取り組んでまいりたいと考えております。

続きまして、学びの広場熊野でございます。こちらは年度当初に登録していただきまして、通年で様々なジャンルの講座を開設するものでございます。

今年度のメニューを申し上げますと、熊野に関する講演会、エコクラフト手芸、健康講話、ストレッチ教室、近隣史跡巡りというものでございました。こちらメンバー固定の傾向がありますが、満足度の高い講座でもあることから、今まで受講していない方を優先的に受け付けるなど、募集方法や、他の講座を組み入れるなど柔軟に再構築を図ってまいりたいと考えております。

続いて、図書館事業の年賀状製本教室、手作り絵本教室でございます。年賀状製本教室につきましては、参加者の広がりが見られないことから、次年度からは、新規受講者開拓のため、別の製本教室を行うこととします。季節を選ばずにできる日記帳製本や御朱印帳製本など、現在検討しているところでございます。

そして、文学鑑賞講座でございますが、講師の後継問題が非常に顕著でございます。ご無理をお願いできることでもないため、これまで年12回を半分にすべきかと考えております。次年度につきましては、文学講座そのものの在り方も検討し、例えば純文学の文学講座にするのか、古典文学とするのかなど、ニーズを探りながら次々年度へと進めることができるよう準備をしていきたいと考えております。

最後に、高齢者対象の生涯学習でございます。冒頭でも申し上げましたが、主に紀和寿学園の今後の取組みとなっております。年間を通して健康講話やレクリエーション、運動会など紀和の方々には楽し

みにしていただいている事業でございます。地道ではございますが、受講者から周囲のお年寄りに声掛けをしていただいて、皆で楽しく続けていくことが当該事業の質の向上と考えております。

また、紀和寿学園に限らず、その講座で会うお友達というのがあるかと思えます。そういった視点に立ちますと、図書館を含めた社会教育課内の各生涯学習事業を予算上の許す範囲内で横断的に組み合わせたり、少しモデルチェンジするなどして絶え間ない学習機会を提供し続け、生きがい創出の一助とすることが普遍の取組みになるものと考えております。

以上、資料の方の説明とさせていただきます。

雑賀総務課長 はい。ただいま、今後の生涯学習事業についてご説明申し上げました。この件に関しまして、ご意見、ご感想などありましたら、どうぞよろしくお願いいたします。

北野委員 今後新たにやる事業と、今後廃止していく事業についてお伺いしたいのと、どれくらいのお金がかかって、どれくらいの効果が出ているのかといった費用対効果が出ているのか、今すぐは難しいと思いますので、今後そういうところを考えて事業を考えていただけたらなと思うんですけど。

弓場社会教育課長 新たな事業としましては、子どもの対象事業となりますが「巡ろう熊野市の文化財」という事業で、小学校5・6年生を対象にして、今年度配布しております子ども文化財読本に取りあげている文化財を巡る講座ということで、定員10名を2回予定しております。それから出前講座といたしまして、山間部、海岸部で区長さんの協力を得て、当該地域の学校を活用して出前講座を開催したいと思っております。

廃止の事業といたしましては、イタリア語会話講座、こちらは講師の方のご都合もありますが、来年度廃止を予定しております。年賀状製本教室につきましては、題材を変えた形の開催を予定しております。

倉本教育長 これからの事業の視点として、今までどちらかといえば、こちらが主体的に考えて実施していたという事業を、受講者の視点に立ってニーズに応じたものにしていくというのが第一でございます。

巡ろう熊野市の文化財というのは、文化財読本というのを今、改訂しております。4月に配布する予定です。これにつきましては、ICT教育がどんどん進んでいく中で。地元の歴史や文化財といったものも大事にしていくという事でございます。

出前講座につきましては、こちらのアンケートのとおり交通手段がネックになっているということで、例えば山間部のある地区でや

る場合に、その会場までも来られない受講者もみえると思います。そういった方は、地区の役員さんと連携して、また、市が交通手段を準備して、巡回して会場までお越しただいて、またそれに乗ってお帰りいただくといったことも考えております。

廃止するものについては、イタリア語というのは参加者の固定化が進んでおります。文学講座については、縮小してまいります。

あと、参加者が固定化しているものもいくつかあります。それについても、教育委員会の役割としては、どちらかというところ、きっかけづくり、新たな経験をしていただくというところを大事にしていきたいと考えておりますので、今年度は、新たな人が入りやすい講座といった形でリニューアルしております。

ただし、定数に余剰があれば、これまで参加していただいた方も入っていただけるといような形で進めてまいります。

根引委員

紀和町の紀和寿学園なんですが、私は紀和町の高齢者見守り活動を行っております。その中で、寿学園で大変忙しいという喜ばしい意味でのお声を聞いております。充実した日々を送っていると。今、コロナの影響もあり、家に籠ってしまうという部分が大きい。ですので、できるかぎり、こういう寿学園のような活動を続けていただいて、人と人の触れ合いや健康管理に役立ててもらいたい。

紀和町の人たちは、感染対策にも気を使ってくれているので、意見をいただきながら、事業内容も考えていってほしいと思います。

弓場社会教育課長  
高見委員

ありがとうございます。そのように進めてまいりたいと思います。

生涯学習という言葉が、一度参加すると生涯楽しめるという意味でとられているんじゃないかなと感ずることがあるので、生涯学習の意味を知ってもらうことも必要なんじゃないかなと思うんですけど。

弓場社会教育課長  
雑賀総務課長  
河上市長

参考にさせていただきます。ありがとうございます。

その他いかがでしょうか。

細かいことですが、前にも申し上げましたが、延べ人数というのは意味の無い数字だから、実人数にしないと評価ができない。計算しないと実際何人参加しているかわからないから、1回あたり実際どれだけの市民が来ているかという数字を出してもらわないと。

生涯学習とは、という高見委員がおっしゃった話にも似たものなんですが、どういう目的でやるかというのは、生きがいくくりという根引委員がおっしゃった話も関わってくるんですけど、学習とついで以上、どれだけ発展していくかという部分があってもおかしくないんじゃないかなと思います。一方で教育長が言われたように、きっかけづくりなんで、発展形まで我々が講座を持つのは難しいと

いうところもあるんですけど、一緒に花づくりとかフラワーデザイン教室とか、こういうことをやった人はおそらく、どこかでそれを展示したいとか、そういった意味での発展はあるかもしれない。そうしたお披露目のようなことを発展として捉えてもいいかもしれない。イタリア語教室は無くなるということだが、例えばイタリア語なら実際会話をする場を作るとかという発展性はあったかもしれない。

学習という言葉が着くと、どんどん発展形の一端を提供する場を作らせてもらうのも、市としてはあるべきなのかなとも思いました。

教育長 高見委員、市長からご意見いただいたことを大事にしていきたいと思いました。

きっかけづくりですけど、作品を皆さんに見ていただく場とか、そういった機会を保障していければ、更なるモチベーションアップに繋がるのではないかと思います。ありがとうございます。

雑賀総務課長 他いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

事項書では、最後にその他というのを3番目の項に設けておりますが、この機会に委員の皆様から何かございませんでしょうか。

河上市長 1つだけ。学校教育課長がいなくなったので、教科担任制について、教育長これからどうしていくかということをお聞かせいただきたいと思います。

倉本教育長 文部科学省の方では、小学校の教科担任制ということで、議論されております。その方向で進んでおります。熊野市の実態としては、規模によって、それが実現できる学校とできない学校があります。ですので、文部科学省の動向や、場合によっては小さな学校でもそれが実現できるような人員的な配置の要望であるとか、熊野市で効果的に教科担任制を進めるうえでは、どのようなシステムにしていくかということを含めて検討を始めているところであります。

河上市長 熊野市で複式学級のように先生が少ないところでは、厳しいかなと思うんですけど、1学年1クラスきちんとあるような学校であれば可能なのかなと思います。既に実験的にやっている都会の学校の話も聞いています。今は良い情報しか入ってこないことの方が多いんですけど、できるのであれば、先生方の教え方とか、そういうものの進化に繋がる可能性があるんじゃないかと、本来は理科の先生が、社会も国語も教えなきゃいけない、数学の先生が違う教科を教えるよりも、理科なら理科の先生が教える方が教え方のレベルアップにも繋がるということが想定はできるので、実際のやりくりは各学校大変だと思いますけど、時間割をどうするかといった問題はあると思いますが、実験的にやるっていうことも含めて、一度はどこかの学

校で挑戦していただけるといいんじゃないかと思っています。あくまでもお願いベースの話なので、ご検討いただけたらなと。

倉本教育長

そのように進めてまいりたいと思います。小規模の中学校なんかは高校受験5教科を含めて全部で9教科あります。その中で配当された教員の中で全て免許持ちの教員が教えることができない場合があります。そんな時は、免外申請といいまして、例えば数学とか国語の先生が家庭科であったり、体育であったり、技術家庭を教えるといった実態もあります。好ましいか好ましくないかという、あまり好ましくないと思います。なんとか、9教科全てが正規免許を持った者がすればいいんですが、今の考え方として、受験5教科につきましては、最低限、正式免許を持った者が指導できるように努めているところであります。

小学校の方もそれぞれの小学校の教員が小学校免許しかもっていない者もおります。中学校の免許も持っている者もおります。そういったこともありますので、配置についても十分考慮していかないといけないと思いますので、今後検討してまいります。

雑賀総務課長

本日様々なご意見頂戴いたしました。これからの事業運営に反映していきたいと思っておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

それではこれもちまして、令和3年度第2回熊野市総合教育会議を閉会いたします。本日はありがとうございました。